不屈の海6

復活の「大和」

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉　画　高荷義之
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目　次

第一章　米軍集結　9
第二章　ビスマルク海再び　31
第三章　鉄壁の艦（ふね）　79
第四章　巨艦激突　141
第五章　崩壊への序曲　219
終章　239
あとがき　246

マリアナ諸島
サイパン島
テニアン島
ロタ島
グアム島
トラック環礁
パラオ諸島
マノクワリ
デュルビル岬
サルミ
ホーランディア
アイタペ
ウェワク
マダン
ラエ
ポートモレスビー
ゲールビング湾
マンベラモ川
カビエン
ラバウル
ニューブリテン島
ニューギニア島

南方地域要図

ルソン島
フィリピン
マニラ
サマール島
レイテ島
パラワン島
ミンダナオ島
セレベス海
ボルネオ島
セレベス島
ソロン
バンダ海
ティモール島

不屈の海 6
復活の「大和」

第一章　米軍集結

1

陽光は、暴力的なまでに苛烈だった。
常夏の島として知られるハワイよりも、遥かに日差しが強い。真っ赤に焼けた針が、天空から降り注いで来るようだった。
ぎらつく光の下、巨大な艦橋構造物と主砲塔を持つ戦艦から、地元民の漁船とさほど大きさが変わらぬ小艇まで、大きさも、形状も異なる無数の艦が、舳先を並べている。
共通点は、どの艦も星条旗を誇らしげに翻らせていることだ。
アメリカ合衆国太平洋艦隊の主力部隊と、陸軍部隊を運ぶ大輸送船団が、ニューギニア北西部のヘールフィンク湾（日本側呼称『ゲールビング湾』）に、その威容を見せていた。
「太平洋艦隊だけで使うのはもったいないな。全合衆国艦隊を収容しても、まだ余裕がありそうだ」
太平洋艦隊司令長官ウォルター・アンダーソン大将は、重巡洋艦「ボストン」の甲板上から湾内を見渡し、冗談めかした口調で言った。
現在、太平洋艦隊の主だった艦艇――海軍の新たな主力となった航空母艦は言うに及ばず、新鋭戦艦、新型巡洋艦のほとんどが、ヘールフィンク湾に展開している。
駆逐艦も、新型のフレッチャー級が大半だ。
給油艦、給糧艦等の支援用艦艇や、陸軍部隊を運ぶ輸送用艦艇、その護衛に当たる護衛空母や駆逐艦は、太平洋艦隊の主力から少し離れた海面に停泊している。
湾の東岸や、湾口に位置するヤーペン島には、多数の兵舎が立ち並んでいる。
南西太平洋軍がニューギニアの完全占領を宣言してから、約四ヶ月。
ニューギニア北西部にある広大な湾は、太平洋艦

隊と南西太平洋軍の巨大な前進基地に作り替えられていた。

作戦参謀フォレスト・シャーマン大佐を従え、ブリーフィング・ルームに入ったアンダーソンを、第三艦隊司令長官フランク・J・フレッチャー中将、第三八任務部隊（TF38）司令官ジョン・S・マッケーン中将といった将官が敬礼で迎えた。

フレッチャーは昨年四月、第二四任務部隊（TF24）の司令官として、サンクリストバル島沖海戦（マライタ島沖海戦の米側公称）を戦った指揮官だ。

同海戦で、TF24は「レキシントン」「サラトガ」の二空母を失ったものの、日本軍の空母「赤城（アカギ）」「加賀（カガ）」を撃沈したことに加え、ラバウルに向かっていた輸送船団の護衛に成功した。

太平洋艦隊司令部は、同海戦の結果を「合衆国の戦略的勝利」と判断し、フレッチャーも「不利な状況の中で、勝利を得た指揮官」との評価を得て、複数の任務部隊を擁（よう）する第三艦隊の指揮を委（ゆだ）ねられることになったのだ。

「フィリピンへの道は整えられたようだね」

提督（ていとく）たちに答礼を返すと、アンダーソンはおもむろに言った。

「このような場所に前進基地を作るだけではなく、太平洋艦隊の主力を集結させることには危惧（きぐ）もあったが、無用の心配だったようだ」

「パラオを無力化してしまえば、この湾は安全です」

フレッチャーの言葉に続いて、第三艦隊の参謀長を務めるカール・ムーア少将が、机上（きじょう）の地図を指しながら言った。

「ミンダナオ島やグアム島からでは遠過（とおす）ぎて、この湾には手を出せません。トラックの日本軍が、カビエンは無力化できても、ラバウルは最後まで無力化できなかった先例（せんれい）と同じです」

ヘールフィンク湾に最も近いパラオ諸島の飛行場は、TF38の攻撃によって既（すで）に無力化した。

日本軍が、ミンダナオ島やグアム島を拠点にヘールフィンク湾を攻撃しようとすれば、一式陸攻を戦闘機の護衛なしで出撃させねばならない。

合衆国は、ニューアイルランド島のカビエンにいた海兵隊航空部隊を、ヘールフィンク湾西岸のマノクワリに移動させ、防空態勢を固めている。

護衛なしのベティなど、全く脅威にならない。

ニューギニア、特にその北西部は、完全に合衆国が掌握しており、次なる一歩、すなわちフィリピン奪回作戦のための策源地となったのだ。

「フィリピン奪回のXデーだが――」

アンダーソンが切り出すと、提督たちが一様に緊張した表情を浮かべた。

フレッチャーも、マッケーンも、来るべきものが来た――と言いたげな表情を浮かべている。

「六月二三日と決定した。作戦名は『鉄の楔』。第三艦隊には、作戦命令の発動と同時に行動を開始して貰う」

「作戦成功の暁には、フィリピンが日本本土と占領地を分断する巨大な楔になるわけですな」

フレッチャーが広域図を見つめ、何度も頷いた。

「鉄の楔」作戦の手順については、既に決められている。

TF38が先陣を切り、フィリピンの日本軍飛行場に航空攻撃を加え、同諸島周辺の制空権を奪取する。

しかる後に、南西太平洋軍隷下の陸軍部隊――ウォルター・クルーガー中将麾下の第六軍が、フィリピン中央部のレイテ島に上陸する。

レイテ島に橋頭堡を築いた後、南西太平洋軍隷下の陸軍航空部隊が同島の飛行場に展開し、フィリピン全土の制空権を奪取する。

しかるのちに、第六軍はルソン島に上陸し、行政の中心地であるマニラを目指すのだ。

この間、日本軍――特に、連合艦隊の主力部隊が、合衆国軍のフィリピン奪回を阻止すべく、行動を起こすことが確実視されている。

そのときは、第三艦隊が総力を挙げて迎え撃ち、連合艦隊と決着を付ける。

開戦直後のカフク岬沖海戦を皮切りに、何度も敗北の屈辱を味わわされた太平洋艦隊だが、今度こそこれまでの借りをまとめて叩き返すのだ。

「できれば、あと半年待ちたかったのだがな」

アンダーソンは、壁に貼られている第三艦隊の編成図を見つめて言った。

「一二月まで待てば、より多数の戦力を揃えられる。現状よりも有利な態勢で、日本艦隊と戦うことが可能だったのだが」

太平洋艦隊司令部が第三艦隊に委ねた兵力は、正規空母と軽空母各六隻、戦艦六隻、重巡一〇隻、軽巡一二隻、駆逐艦九〇隻だ。

開戦以来、最大規模の兵力だが、新時代の主力となる空母はやや数が少ない。

艦だけであれば、エセックス級正規空母とインデペンデンス級軽空母八隻ずつを揃えることが可能だが、エセックス級二隻とインデペンデンス級二隻は乗員の習熟度が不充分と判断され、参加が見送られたのだ。

海軍は一連の戦いで、熟練した乗員や艦上機クルーを失い、人員不足に悩まされている。

特に、アガ岬沖、サンクリストバル島沖の二大海戦における空母五隻の喪失が痛手だ。

これら五隻には、新造空母への配属が予定されていたベテランも多数乗艦していたため、海軍の人事計画に大幅な狂いが生じたのだ。

あと半年の猶予があれば、「鉄の楔」への参加を見送った空母四隻を戦列に加え、一層強力な布陣で日本艦隊との決戦に臨める。

前線部隊の指揮官に、不充分な戦力しか揃えてやれなかったことは心苦しかったが――。

「戦力が不充分だとは、私は考えておりません」

マッケーンが、いかつい顔を僅かにほころばせた。

「日本軍は、空母一二隻程度を投入して来ると見積

もられています。空母の数は日本軍とほぼ互角に見えますが、一艦当たりの搭載機数は、我が軍の空母の方が多いのです。また艦上機は、性能面で零戦や九九艦爆、九七艦攻を凌駕しています。数と質の両面で我が方が上回る以上、勝利を握ることは充分可能です」

「水上砲戦にもつれ込んだ場合でも、我が方が有利です」

マッケーンに続いて、第三四任務部隊司令官のフランクリン・V・ヴァルケンバーグ少将が言った。

カフク岬沖海戦でただ一隻生き残った戦艦「アリゾナ」の艦長として、勇名を馳せた指揮官だ。

アンダーソンにとっては、カフク岬沖海戦の記憶を共有する戦友だった。

「我がTF34の戦艦六隻は、いずれも一九四二年以降に竣工した新鋭艦です。一方日本艦隊の戦艦のうち、新鋭艦は二隻だけで、後はワシントン条約以前の旧式戦艦です。戦艦同士の撃ち合いとなれば、我が方が圧倒します。――我が海軍が異常なまでに恐れていた大和型が相手でも」

「ヤマト・タイプ」の一語を発したとき、ヴァルケンバーグの言葉に力がこもった。

合衆国海軍の軍人である以上、日本が世界最強と豪語する新鋭戦艦と勝負してみたい。

その心情が見て取れた。

「問題は、日本艦隊が仕掛けて来るタイミングだ」

アンダーソンは言った。

「TF38がフィリピンを攻撃しているときに仕掛けて来れば、第三艦隊は日本艦隊との戦闘だけに集中できる。しかし、陸軍部隊がレイテ島に上陸した時点で来襲されると、第三艦隊は上陸した陸軍部隊や輸送船団を守りながら、日本艦隊と戦わねばならなくなる」

フィリピン攻略を担当する第六軍は、麾下に六個師団を擁しており、総兵力は二〇万を超える。

地上戦闘になれば、フィリピンを守備する日本陸

軍部隊を圧倒することは間違いないが、輸送船で運ばれている間は無力だ。

二〇万もの陸軍部隊を無為に失うようなことがあれば、大統領といえども地位を保つことは難しい。

合衆国史上初の四選を狙っている現大統領にとっては、何としても避けたい事態であるはずだ。

「日本艦隊の動きについて、情報収集を綿密に行えば、勝利は自ずと見えて来ます」

フレッチャーが自信ありげに言った。

「日本艦隊撃滅の捷報と星条旗が立ち翻るマニラは、四選を目指す大統領閣下の後押しとなるでしょう」

2

「フレッチャー中将が、そんなことを言ったのかね」

アメリカ合衆国大統領フランクリン・デラノ・ルーズベルトは、顔をほころばせた。

たった今、海軍作戦本部長ハロルド・スターク大将は、アンダーソンから伝え聞いたフレッチャーの言葉を、ルーズベルトに伝えたのだ。

「作戦の発動は、現地時間の六月二三日〇時。ワシントン時間の六月二二日一〇時となります。日本軍の頑強な抵抗が予想されますが、一〇月中にはマニラを奪回できるでしょう」

「一〇月中か」

統合参謀本部議長ウィリアム・レーヒ大将の言葉に、ルーズベルトは満足そうな笑みを浮かべた。

大統領選挙は、一一月に予定されている。一〇月にマニラを奪回すれば、ルーズベルト念願の四選に対して、これ以上強力な後押しはない。

「我が軍がフィリピンを制圧した時点で、イギリスは日本との中立条約を破棄し、対日参戦するとのことですが、どの段階で『フィリピンが制圧された』と見なすのでしょうか？」

陸軍参謀総長ジョージ・マーシャル大将の問いに、ルーズベルトは答えた。
「イギリス政府からは、『マニラ制圧の時点を以て』との回答が届いている。参戦時期をもう少し早めるよう、ワイナント（ジョセフ・ワイナント。駐英米国大使）に交渉させているが」
「レイテ島の制圧時点で、との条件を出してはいかがでしょうか？　レイテ島の制圧が終わった時点で、フィリピンの制空権、制海権は完全に我が方が握っていると想定されます。レイテの制圧に成功すれば、ルソン島は奪回したも同じです」
　レーヒが意見を述べ、マーシャルが同調した。
「その条件なら、八月中にはイギリスの対日参戦が期待できますな。第六軍の戦力なら、レイテ制圧に二ヶ月とはかかりますまい」
「イギリスは、本当に対日参戦するのでしょうか？　私には、かの国が我が合衆国よりも日本に肩入れしているように見えるのですが」
　陸軍戦略航空軍司令官ヘンリー・アーノルド大将が疑問を口にした。
　戦略航空軍は、麾下の第8航空軍（8AF）をイギリス本土に展開させ、イギリス軍と協力して戦っている。
　それだけに、イギリスの動きに敏感なのだ。
「イギリスの対日参戦については、チャーチルの確約がある。イギリスの参戦前に、日本が白旗を掲げれば話は別だが」
　ルーズベルトは、自信ありげな表情で答えた。
　大統領であるこの私が、チャーチルを信用しているのだ。諸君も信じたまえ――そんなことを言いたげだった。
「我が軍がフィリピンの制圧に成功すれば、イギリスの参戦は、あまり大勢に影響しないでしょう。日本がオランダ領東インドやフランス領インドシナを占領していても、本国に資源を運ぶことはできなくなります。この状況下で、イギリスが仏印、蘭印を制圧しても、あまり意味はありません」

スタークの言葉に対し、ルーズベルトは言った。
「イギリスの対日参戦には、日本の希望を断つという意味もある。彼らには、我が合衆国に屈服する以外の選択肢はないのだと、具体的に思い知らせてやるのだ」
「フィリピンや仏印、蘭印を失い、なお日本が屈服しない、という可能性も考えられますが」
スタークの言葉に対し、アーノルドが微笑した。獲物を前にした肉食獣を思わせる笑顔だった。
「その場合は、ドイツと同じ運命がかの国を待っているだけです」

3

「目標視認。前上方！」
ドイツ空軍第四六戦闘航空団（JG46）の指揮官エーリヒ・ラング少佐は、麾下全機に呼びかけた。
北海に注ぐエルベ川の河口沖から、敵の大編隊がドイツ本土に迫っている。
四〇機前後と思われる梯団が八隊。機数は三〇〇機を超える。
西から東に向かっているため、昇る朝日を正面から受け、鈍い輝きを放っている。
太い胴に、高翼式に取り付けられた主翼。四基のエンジン。胴体上面や下面に突き出した、多数の旋回機銃座。
ボーイングB17〝フライング・フォートレス〟やアブロ・ランカスター同様、ドイツ空軍の戦闘機乗りには見慣れた機体だ。
コンソリデーテッドB24〝リベレーター〟。B17と並ぶ、もう一つの「空の要塞」だった。
「『シュナウザー』より『猟師』。目標視認。敵機はB24。機数三〇〇以上。今より攻撃する」
「『シュナウザー』より各隊。敵機はB24だ。馴染みの相手だからといって、気を抜くな」
ラングは指揮所に報告を送り、次いで麾下全機に

下令した。

「『シェパード』了解」

「『ワイマラナー』了解」

第一、第二中隊の指揮官より応答がある。

ＪＧ46の装備機は、メッサーシュミットＭｅ２６２。ドイツ空軍が誇る、世界初の実用ジェット戦闘機だ。

昨年一一月より戦線に投入され、ドイツの空の守りに就いている。

最大時速は、高度二万フィート（約六〇〇〇メートル）で八七〇キロ。高高度の三万フィート（約九〇〇〇メートル）でも八二〇キロに達する。連合軍のいかなる戦闘機よりも優速だ。

火力は、機首の三〇ミリ機関砲四門と極めて強力であり、重爆撃機の分厚い装甲鈑でも、容易に引き裂くことができる。

ヨーロッパの空では無敵と呼べる存在だが、欠点は生産コストが高く、充分な機数を配備できないことだ。

ドイツ空軍の戦闘航空団は、指揮小隊四機、一二機編成の中隊三隊、合計四〇機が定数だが、ＪＧ46は指揮小隊と二個中隊、合計二八機の編制となっている。

二八機で三〇〇機以上を相手取るのは厳しいが、敵が目の前にいる以上は戦わねばならない。

ＪＧ46が大きく散開し、ラングも指揮小隊の三機を率いて突撃に移った。

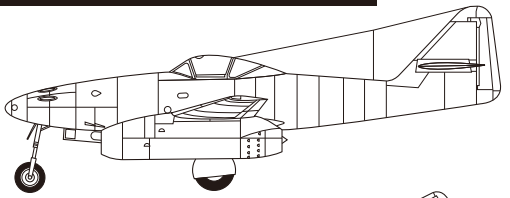
指揮所は、敵機の高度を二万フィートと報告している。

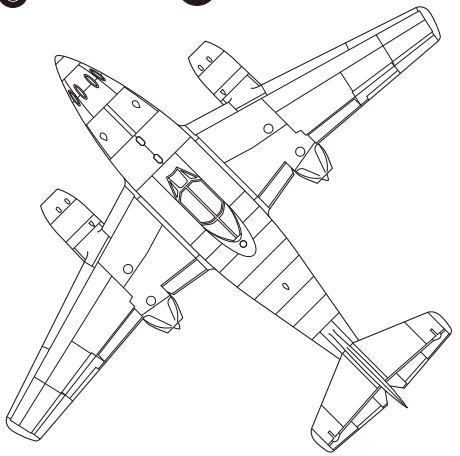
ラング機の高度は一万八〇〇〇フィート。Ｍｅ２６２の性能なら、二〇〇〇フィートの高度差などものともしない。

高度計の針が、プロペラ機のそれとは比較にならないスピードで回転し、照準器を通じて見る敵機が拡大する。

「『イェーガー』より『シュナウザー』、敵が上昇し

ドイツ空軍 Me262 A-1a





全長	10.6m
翼幅	12.5m
全備重量	6,400kg
発動機	ユンカース Jumo 004B-1ターボジェット（推力910kgf）×2基
最大速度	870km/時
兵装	30mm機銃×4門（機首）
乗員数	1名

世界で初めて実用化されたジェット戦闘機。ドイツにおけるジェット戦闘機の開発は1938年から始まった。機体設計は順調に進んだが、ジェットエンジンの開発は難航し、本機の試作機も当初は機首にレシプロエンジンを装備して飛行特性をテストしていたほどである。

その後、1942年7月18日にジェットエンジンを装備しての初飛行に成功。以後、さまざまな改良を施し、1943年9月11日、増加試作機6機で編成された実験部隊が米爆撃機隊を迎撃。18機撃墜の大戦果を挙げている。

機動性には欠けるものの、圧倒的な速度性能を誇る本機は、爆撃機に対する一撃離脱戦法ではほぼ無敵であり、ドイツ防衛の切り札として注目されている。

ている！」

指揮所が注意を喚起したが、ラングは構うことなく突進した。

Ｂ24の胴体下面に閃光が走り、青白い曳痕が正面から殺到して来るが、Ｍｅ２６２は、敵弾などものともせずに突き進む。

指揮官機とおぼしき一機を目標に、機関砲の発射ボタンを押す。

腹の底にこたえるような連射音と共に、四条の太い火箭が噴き延びる。発射の反動で照準器が振動し、敵機がぶれて見える。

ラング機の射弾は狙い過たず、Ｂ24の二番エンジンを捉えた。

エンジン・カウリングが吹き飛んだのだろう、Ｂ24は黒煙を引きずりながら高度を落とし始めた。

ラングは一旦機体を降下させ、敵機の射程外に逃れる。

指揮小隊の二、三、四番機――フリッツ・ボーデンヴェーバー大尉、ヘルマン・フリッケ中尉、ウィルヘルム・ビット少尉の機体も、それぞれＢ24に一連射を叩き込み、ラング機に追随する。

敵編隊の後方に抜けたところで、ラングは水平旋回をかけ、敵機の後ろ下方に占位した。

ざっと見ただけでも、一五、六機のＢ24が黒煙を引きずり、編隊から落伍している。

「『シュナウザー３』、エンジン損傷。離脱します」

指揮小隊三番機のフリッケ中尉から、報告が入る。飛び散った破片を、エンジンに吸い込んだのかもしれない。

「『シュナウザー１』了解。無理をせず、次の機会を待て」

ラングはフリッケに帰還を命じ、残った二機を率いてＢ24を追跡した。

高度が上がるにつれ、上昇速度が鈍り始める。

Ｍｅ２６２は、高高度でも八〇〇キロを超える最大時速を発揮できるが、上昇力は衰える。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。